

昭和十七年（一九四二年）

四月十八日、五中で掃除を終えてバケツを整理していた時、上野の不忍池の方向に二機の飛行機が超低空で飛んで

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん あん かく え

⑤

いるのが見えた。「あれ、日本の飛行機ではないな」と思ったら、高射砲が地上から射ち出し始めた。これが、空母ホーネットから発艦し、東京を初空襲したB25ドリットル爆撃隊だった。

五中できっとも勉強したの、は二年へりこで、三年で

なると兵器廠での学徒動員、軍事教練、援農作業などで勉強どころではなくなった。

昭和十九年当時の記録を見ると、四月五日から三週間、十条の陸軍兵器補給廠へ。倉庫より製品を搬出。五月一日、富士の裾野へ野外教練、六日、富士の裾野へ野外教練、三八式歩兵銃などの訓練。十月二十一日から約二週間、立川近郊の出征軍人の留守宅へ

三時の菓まんだった。

同級生の兼重一郎は、ここで昭和二十年三月十日の東京大空襲を経験した。飛鳥山から十条までの道すがら、全部、焼け野原だったが、飛鳥山の桜だけは満開だった」と述懐していた。彼は後に、いすゞ自動車専務になった。当時の悲しい思い出が、六月二十一日から約二カ月、江

文化財壊す悲劇 体感

3年終了で海軍兵学校へ

援農作業。陸稲刈り、イモ掘り、牛を引いて土手の草を食わせる。

戸川橋付近で行った民家強制疎開だ。空襲を受けた時に類焼を防ぐ避難地を作るための家の取り壊し作業のことだ。

数寄屋風の見事な日本建築の家も、我々中学生が畳や建具を搬出した後、大学生が壁を打ち抜き、屋根にロープを掛けて皆で引き倒す。家の住人のうらめしそうな表情が目

は違う耐えがたさがある。

家族は十九年十月、父が広島市の戒善寺（現中区小町）の住職になったため、私だけを残して引越した。私は永田町に下宿した。父の弟が戦争でハワイに帰れなくなって日本にとどまっていたが、そのお嬢さんの実家が永田町で待



海軍兵学校受験で添付した写真

三月のある夜、送別会もなく、単身、東京駅から広島行きの列車に乗ろうという時、薄

暗がりから遣兵廠掃りの田中和雄と鈴木善夫が現れた。「そうか、行くのか」「元気でやれよ」と声をかけられて、「分かった、それじゃ」と言っ

が目頭が熱くなった。見送る二人が駅の光に包まれる。私は挙手の礼で応えた。

（インターストリアル・デザイン）

二十年二月に合格電報が届いた。兵学校は普通四年終了で入るが、我々のころは一年繰り上がって三年終了で入れた。外地も含め受験者は大変な数にのぼったが、三千八百人が合格した。すぐに兵科教育に入るのではなく、専門学校の予科的な感じだった。正式には海軍兵学校七十八期生徒だが、通称は予科生徒と呼ばれていた。

合をしていたのだ。そこではモーパッサンの「女の一生」を読んで一人興奮していた。同年十二月中旬、海軍兵学校の入学試験を江田島で受けた。学校からは成績順に推薦され、数学、理科物象が試験科目。数学の試験には、筆

運にも中学で勉強していた水深を測る問題が出た。